

平成 26 年秋季展

# そして能は広がる。

— 「謡曲・能楽」の定着と金沢—



国楽譜(091.7-224)

平成 26 年 10 月 1 日(水)～11 月 23 日(日)

金沢市立玉川図書館 近世史料館

## はじめに

室町時代に大成された猿楽の能と狂言は、専門の役者が舞台を勤めるだけでなく、やがて謡を習う素人が増え、謡本が書写・出版されてゆくと共に、舞台にも権力者が立ち、豊臣秀吉・徳川家康・前田利家のような諸大名らが共演・競演する時代になります。徳川幕府は猿楽を將軍宣下等の祝賀の式楽に採用し、徳川幕府瓦解後、猿楽は欧米で賓客をもてなすオペラの役割を期待され、新しく能楽の呼称のもとに復興します。

本展示では、徳川幕府の初期から使用され始めた「謡曲」、明治期に定着する「能楽」、という二つの言葉に注目して、その読み方や様々な異称、近世の注釈や近代の新作の具体例を、金沢ゆかりの著作を中心に紹介し、合わせて能の金沢への定着についても、本館所蔵の史料でたどってゆきます。

### 1. 「謡曲」と書いて「ヨウキョク」と読むのはいつ頃からか

謡曲作者として知られる世阿弥は、謡曲という語を用いていません。謡い物や能の作品は、たとえば「高野の古き謡」、「松風村雨の能」、その本文は「謡の本」「能の本」と呼びました。

#### ◎「豊臣秀吉譜」(林羅山著、明暦4年(1658)刊)(091.9-195)

豊公能5番の新作(「吉野花見・高野参詣・明智・柴田・北條征伐」)を「五番之謡曲」と呼び、「謡」の文字に「ヨウ」の読み仮名を振っています(下巻24丁、写真右)。また、豊臣秀次による「謡抄」編纂に関して「謡曲百番ヲ註解シテ」と書いた部分の「謡」の文字に、やはり「ヨウ」の読み仮名を振っています(下巻25丁、写真左)。これらは、「謡曲」と書いて「ヨウキョク」と読ませることを明示した最も早い例と見られます。

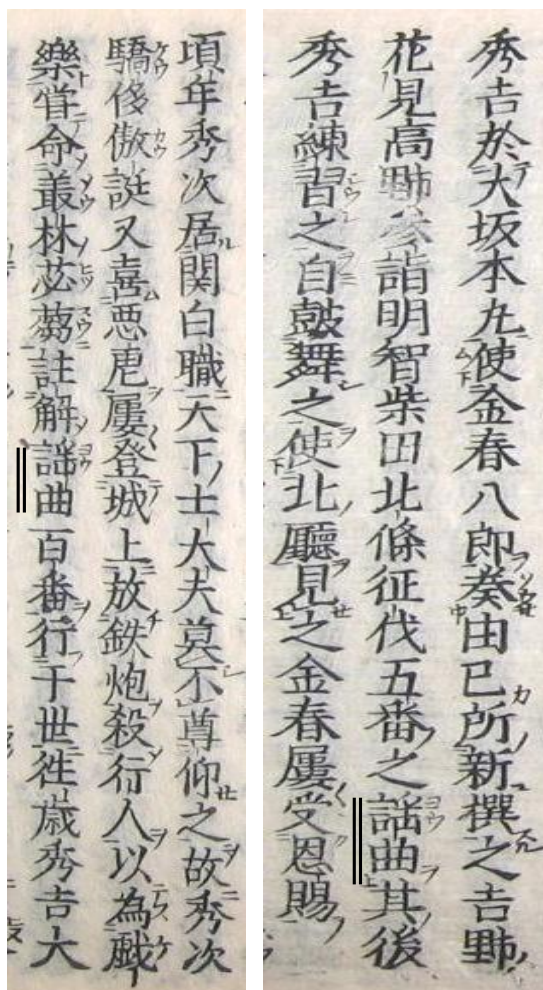
#### ◎宝生流「寛政謡本」(寛政11年(1799)刊)(13.7-1)

宝生流謡本の最初の刊本が本書です。本書の奥付には「当流所伝之謡曲二百拾番伝写之本従多異令校正以令刊行畢于時寛政乙未暮春/宝生大夫(花押)」とあり、この頃から「謡曲」の語と読み(「ヨウキョク」)も一般化してゆくといわれています。

#### ◎「新作謡言」(明治25年(1892)森田柿園写)

(091.7-215)

豊公能新作5番をこの写本では「新作謡言」と総称しています。「謡言」の語は、これより早く後述の「謡言粗志」に見え、そこでは文字通り謡の言葉についての注釈を書名としたようです。





## 2. 謡曲注釈の系譜と加賀藩

能や狂言は豊臣秀吉が自ら演じ、徳川幕府の式楽となる頃から、古典芸能の地位に上昇します。その作品としての謡曲も、古典文学として研究の対象となります。謡曲注釈の最初の著作が、文禄4年(1595)に豊臣秀次の命により編纂が開始された「謡抄」です。五山の僧や各界の専門家が集まり、百番余りの謡曲に注釈が施されました。次いで、明和9年(1772)刊、犬井貞恕著・空華庵忍鎧増訂の「謡曲拾葉抄」も影響力が大きく、「謡抄」と共に今日でも謡曲研究に活用されています。「謡抄」の「謡」から「謡曲拾葉抄」の「謡曲」へ、書名に使用する語が変化して、次第に後者が定着してきます。

### ◎「謡言粗志」(佐久間寛台著)(16.97-77)

加賀藩御書物奉行を務めた佐久間寛台が、宝生流謡曲の全曲210番を対象に注釈書を書き上げ、加賀藩に提出しました。文化6年(1809)提出の内篇100番、同9年提出の外篇110番、計210番、全42冊から成ります。加越能文庫本は「拾遺」「訂補」と一組の清書本で、『金沢市立図書館蔵謡言粗志一翻刻と校異一上・下』(1989・90年刊)に翻刻されています。

### ◎「謡言粗志漏脱」(16.97-80)

全3冊。清書本「謡言粗志」の別冊補注。文政年間以前の成立と見られます。

### ◎「謡言粗志拾遺」(16.97-78)

全3冊。「謡言粗志漏脱」を整訂、清書した本です。

### ◎「謡言粗志訂補」(16.97-79)

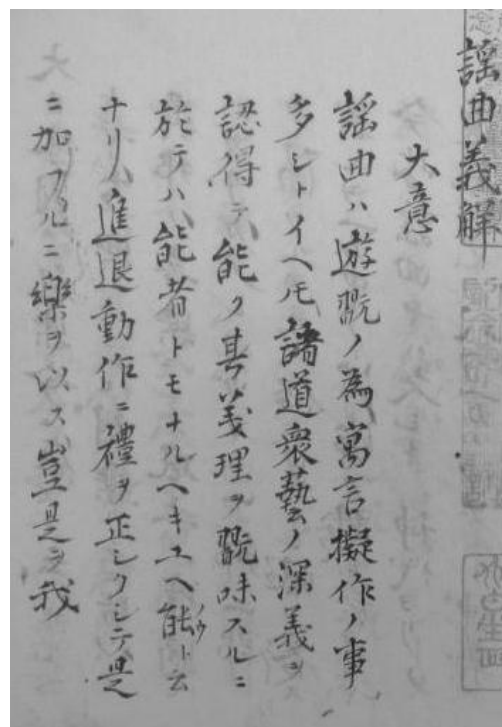
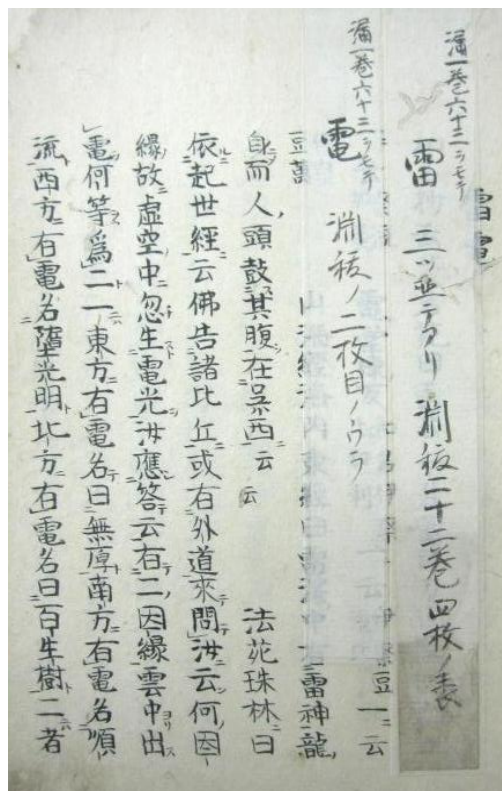
全4冊。天保2年(1831)、加賀藩の老臣村井長道は自筆本「謡言粗志」を借覧して、近臣の渋谷重武・河合良温・勝木元直に書写させました。書写にあたり誤字脱字の訂正を施し、別に異見を記した考察編を「謡言粗志訂補」と名付けて一書にまとめました。

### ◎「謡言粗志」(K773-113)

昭和62年(1987)に再発見された本です。計21冊、すべてが外篇で2冊目を欠きます。本文は加越能文庫本の系統ですが、曲の並びが他本と異なり、大量の付箋が貼られています(写真上)。

### ◎「謡曲義解」(091.7-74)

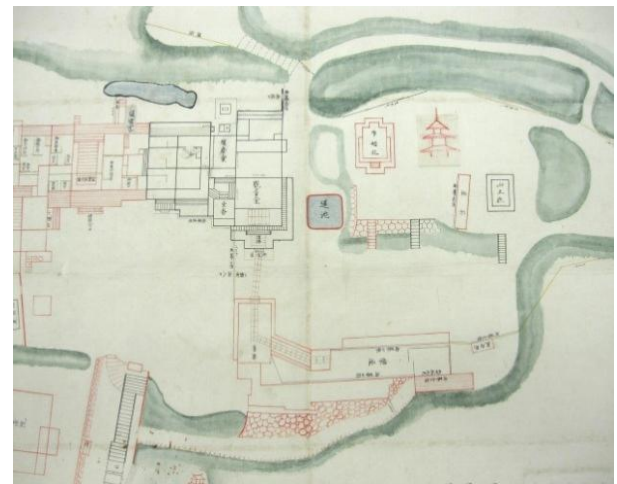
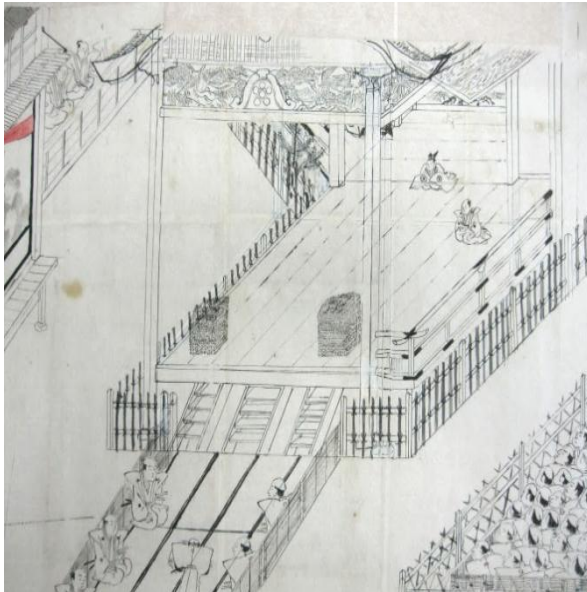
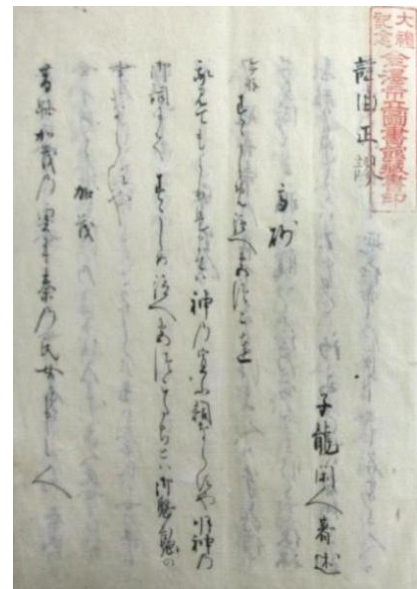
現存するのは6冊、「高砂・田村・熊野・班女・鶺鴒・難波・兼平・千手・卒都婆小町・船弁慶・老松」の11番分です。加賀藩12代藩主前田齊広なりながの晩年、文政年間の事業と推定されます(写真下)。



◎「謡曲正謬」(子龍閑人著)(091.7-44)

狭義の注釈書とはいえませんが、著者が誤謬と見なす謡曲の詞章を引いて、独自の評論を展開しています。「高砂」(写真右)以下50番を対象とします。

■加賀藩時代の舞台…「金沢城二之丸御殿明細図」(K2-839)、「観能之図」(096.0-152)部分(写真中左)、「卯辰観音院境内図」(大1039)部分(写真中右)。



### 3. 「謡曲・能楽」の様々な異称

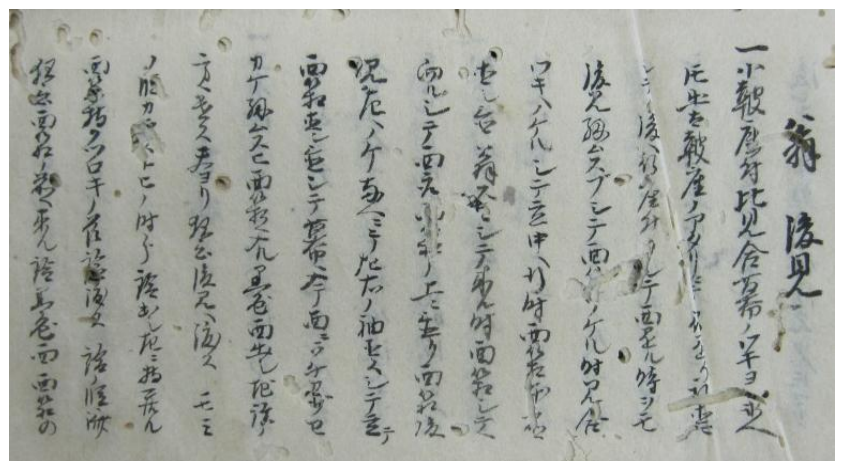
「謡曲・能楽」の語が定着するまで、それらも含めて様々な呼称が使用されました。「舞曲・舞楽・音曲・和楽・乱舞・唱曲・武曲・武楽」などが、種々の書名に見いだされます。

◎「徳華問答抄」(竹田権兵衛広貞著)(096.7-121)

享保元年(1716)跋、刊行は翌年ころと推定されます。金春大夫家別家竹田権兵衛家は京都在住の加賀藩御手役者の家です。書名は「楽記」に「楽者徳之華也」とあることによります。

◎「秦曲拔萃」(23.7-18)

「秦曲」は「謡曲」の異称の一つですが、本書は詞章の拔萃ではなく、舞台の進行を追いながら、特に後見の仕事を具体的に記述しています。「翁 後見」を冒頭に置き(写真右)、「高砂」以下「禅師曾我」まで宝生流所演曲の全体を範囲とします。



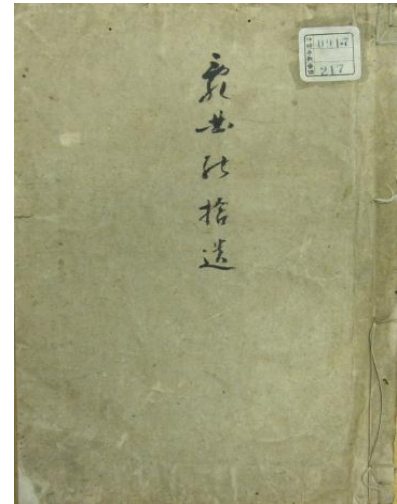


### ◎「乱曲」(091.7-52)

クリ・サシ・クセ等から成る<sup>くせまい</sup>曲舞謡の集成には、その書名に「曲舞・久世舞」とは別に「乱曲・蘭曲」が使用されることがあります。本書は「上宮太子」以下の 33 番を収載しています。明治 28 年 (1895) 刊「桜井」(喜多流)のクセを「正成遺訓」の題で、また前田齊泰作「富有園」も加えています。

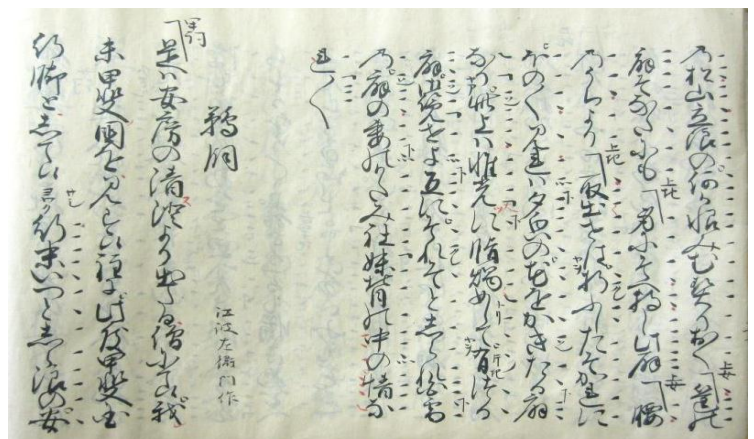
### ◎「舞曲の拾遺」(091.7-217)

能を舞楽と呼ぶことは貞享 4 年 (1687) 刊「舞楽大全」ほかの書名に確認できます。本書にいう「舞曲」とは「舞楽」の曲、つまり「謡曲」を意味します。本書は「明石」以下の 14 番を収載しています。多くは「乱曲」に重なりますが、最後の「桜井」のみは節付がなく、シテ楠木正成の名乗りに始まる上記の完曲です (写真右)。



### ◎「国楽譜」(091.7-224)

中身 (写真中) は天保 15 年 (1844) 刊宝生流謡本 (通称富山版) 系統の写しと見られます。花・鳥・風・月の計 4 冊 210 番から成ります。目次の前の遊紙には寺子屋で謡の稽古をする人々 (花冊。本解説表紙) や「望月」後シテの登場 (鳥冊) を描いた紙が貼られています。月冊には「宝生将監自筆之正之写」との朱書も見えます。表紙題簽には「国楽譜」と書かれ、「国楽」の呼称は書名としては類例を見ませんが、金沢で創刊された雑誌『能楽時報』の第 5 号 (明治 44 年 (1911) 8 月) に本間広清「能楽を国楽と云ふ所以」という文章が掲載されています (写真 7 頁上)。



### ◎「乱舞枢要論」(波吉左平次著、雑誌「能楽時報」(K773-54)所載)

『国書総目録』には伝本を記載していません。雑誌『能楽時報』の第 1 号～第 10 号 (明治 44 年 (1911) 4 月～45 年 1 月) に<sup>しやくみ</sup>曲見平太 (日置謙の筆名) が連載した翻刻で読むことができます。



## 4. 「能楽」の提唱と金沢におけるその定着

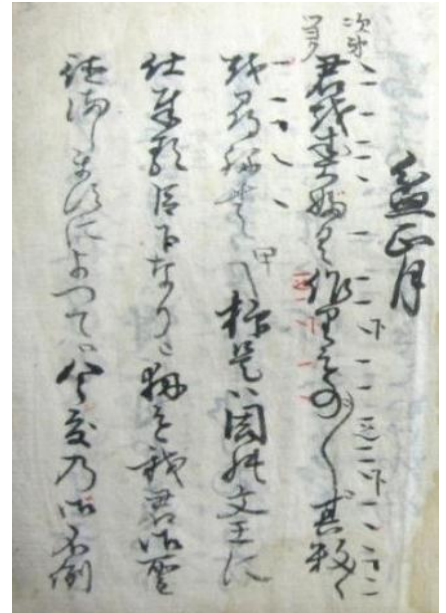
明治 13 年 (1880)、岩倉具視邸の会で新しい呼称が検討され、幕府の「御能」、京都の<sup>ラップ</sup>「乱舞」、室町の「猿楽」、古称の「散楽」等に代えて、新しく「能楽」を使用することが決まります。検討を依頼した前田齊泰 (写真右は明治 9 年撮影) (090-1001-223) は満足して、翌年舞台開きの行われた芝能楽堂へ自筆の「能楽」額と「能楽記」なる文章を掲げました。能楽復興の中心にいた人々の宣言を経て次第に諸方面で定着してゆきます。

◎「申楽免廢論」(前田齊泰著)(K1-87)

加賀藩 13 代藩主前田齊泰<sup>なりやす</sup>は脚気を患い、仕舞を日課として脚力を回復した体験から、能芸の鍛錬が身体を健全にするとの確信を得て、弘化 2 年 (1845) 本書の執筆を思い立ちました。書名に使用された「申楽」<sup>さるがく</sup>のほか、「謳舞・舞曲・乱舞・能曲」等の語が散見します。

◎「謡曲「盆正月」」(16.97-81)

加賀藩では、藩主の慶事に際して町・在の者に仕事を休ませ、作り物や獅子・祇園囃子などを繰り出す形で祝意を表させました。弘化 2 年 (1845) 2 月の盆正月は、上述の脚気が治癒した祝いに 3 日間の休日とし、一統に赤飯が振る舞われた時の様子を、各町の謡曲ゆかりの作り物を見て回るていの謡曲 (写真右) に仕立てています。



◎「能楽記」(前田齊泰著)(16.97-16)

齊泰は様々な古称を挙げて、「今定めて能楽と曰う」と宣言しています。齊泰の揮毫した額の文字は、明治 35 年 (1902) に創刊される雑誌「能楽」の表紙にも使用されます。

◎「別格官幣社尾山神社絵葉書 4 絵馬堂及能楽堂」(18.11-12)

尾山神社の舞台は明治 11 年 (1878) 8 月に落成し、9 月に舞台開きの能楽が行われました。この舞台を本絵葉書 (写真左下) では「能楽堂」と呼んでいます。泉鏡花「卵塔場の天女」(昭和 2 年)



堂楽能及堂馬繪 社神山尾社幣官格別 町西市澤金

では、尾山神社の能舞台と思われる場所を「能楽堂」と呼んでいます。



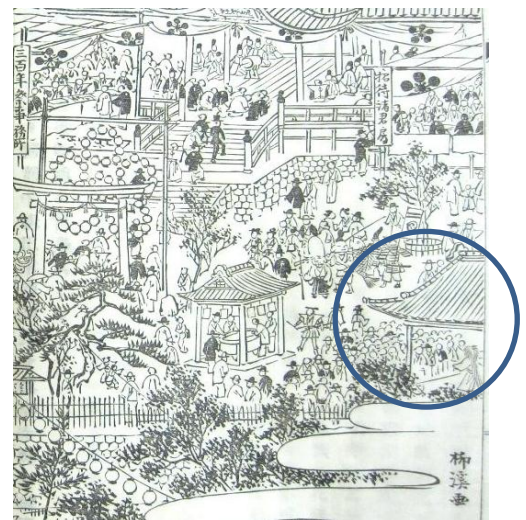
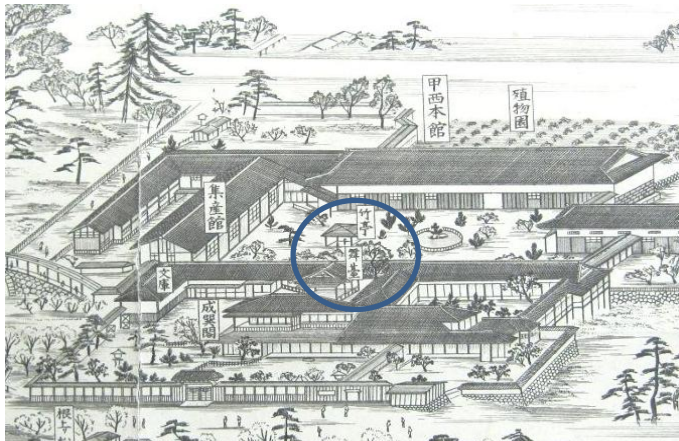
◎「尾山神社演能」(藤田蓬壺画)(090-1221-8)

藤田蓬壺<sup>ほうこ</sup> (政次郎、正信) は下掛宝生流のワキ方として活躍する傍らいわゆる能楽画もよくし、『能楽時報』には金沢能楽会の演能を挿絵で伝える仕事もしています。写真 (右上) は明治 32 年 (1899) の旧藩祖三百年祭の演能を描くとされます。

◎『能楽時報』(K773-54) 明治 44 年 (1911) 4 月、金沢で創刊された月刊の能楽雑誌です。大正 2 年 (1913) 5 月の第 25 号まで続きました。写真 (次頁上) は本間広清「能楽を国楽と云ふ所以」を掲載した頁で、挿絵は宝生嘉内の「橋弁慶」を藤田蓬壺が描いています。



■明治維新後の金沢の舞台…  
「金沢開始三百年祭記事」  
(096.0-7)部分(写真中右)(画面右  
下端が尾山神社の能舞台)、「金沢  
公園勸業博物館之図」(096.0-274)  
部分(写真中左)(博物館・成巽閣  
の舞台。中央に「舞台」の文字が見  
えます。)\*共に明治11年(1878)  
に舞台開きが行われ、佐野舞台  
建設以前の重要な場所となります。

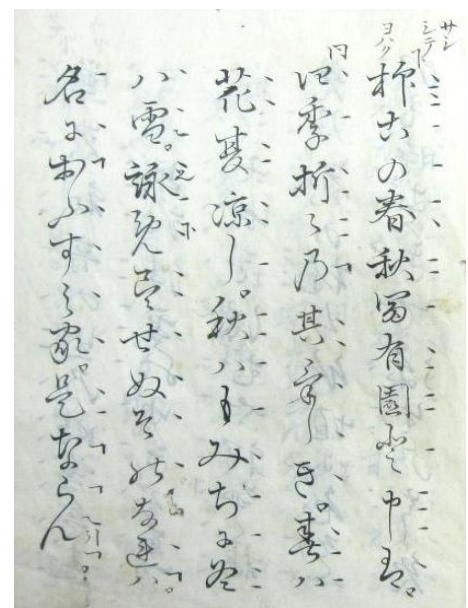


## 5. 近代の謡曲研究と謡曲の新作

『石川県史第貳編』には、加賀藩後期の擬謡曲集に「謡曲万寿抄」なる書があり、天保元年(1830)、加賀藩14代藩主前田慶寧の誕生を祝う「盆正月」や安永9年(1780)、金谷御殿での奸臣刺殺を脚色した「竹の露」ほか、「酒三輪・日待頼政・葉葵上・酒三井寺・自然居士・大食景清・酒鉢木・鼠景清・鶉飼・鉄輪・放下僧」を収載すると伝えています。こうした伝統は近代の諸作品にも継承されてゆきます。

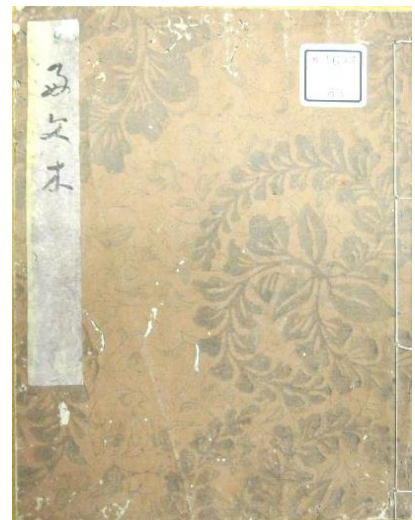
### ◎謡曲「富有園」(K7-144)

明治4年(1871)の東京移住後、前田齊泰は金杉村の根岸邸を隠居所とし、富有園と呼びました。明治8年には舞台を建設して、明治17年に亡くなるまで、種々の催能を老後の慰みとしました。齊泰作と伝える謡曲「富有園」ではその地の四季折々の景色をめで、上野や忍の岡など近隣の地名も織り込んで、神に守護されてゆるぎのない住居を自讃しています(写真右)。



◎謡曲「好文木」(16.97-83)

明治7年(1874)4年29日、尾山神社の拝殿で服部嘉内が能を奉納した時、初めて「好文木」が演じられました。作者は祀官加藤里路で、中教院少教正前田利鬯(大聖寺藩第14代藩主)が節を付けたとも記されています。前年に行われた現在地への遷座を記念する作品といえます(写真上)。

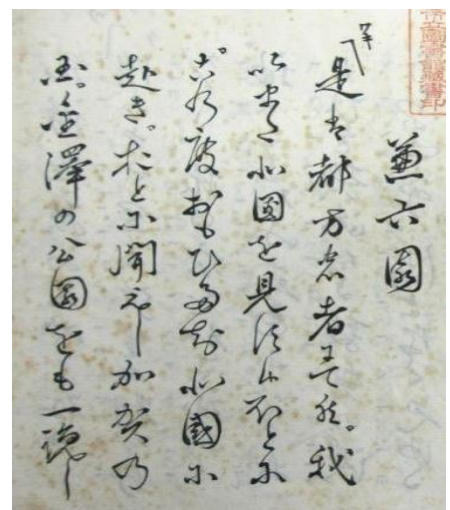


◎「謡曲安宅考 附安宅ニ関スル新聞切抜」(096.7-130)

三好保弘「謡曲安宅考」を藤本純吉が書写し、戸水信義「謡曲安宅異同弁」、和田尚軒「謡曲安宅異同弁に就きて」、栗田青雲楼「安宅」に於ける口碑と史蹟、関卒顧歩「安宅の口碑伝説に就て」の4編の新聞記事の切り抜きを合綴してあります。

◎「謡曲松原詣」(091.7-80)

武田耕雲齋率いる水戸藩士のいわゆる天狗党は京都へ進軍途中、敦賀で幕府軍(越前・加賀勢)に降伏し処刑されます。処刑は元治2年(1865)のことでしたが、明治維新後、その貢献が見直されて神霊が敦賀の松原に祀られます。気比神宮の宮司清彦(ワキ)から社殿の造営を懇願された前田侯爵家の支援により新殿が落成し、明治31年(1898)10月9日、前田家の家令(前シテ)や福井侯松平家の子息をはじめ、ゆかりの人々や遺族が参集するという設定です。

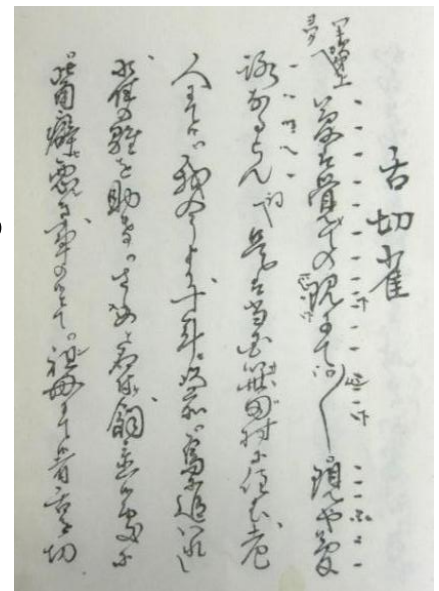


◎謡曲「兼六園」(K912.3-442)

明治38年(1905)、宮崎豊(礪川迂叟)の識語には、作者福島杏山の篤志に感じて、広く勸業従事者に頒布するため刊行したと記されています(写真中)。

◎「舌切雀」(宝生流謡曲)(096.7-131)

同書(写真下)記載の略歴によれば、作者の国枝逸蟻(1842~1922)は石川・富山両県で郡長を歴任した人物であり、宝生流の謡の門弟は百人を数えたといえます。また、明治35年(1902)に举行された「尾山神社昇格慶賀会記事」(090-1231-8)には、舌切雀の山車と雀踊り(賢坂辻、小将町の出し物)が評判を呼んだとあります。舌切雀のお話の全国的な人気は「教育画 噺舌切雀」(913.8-10)(大阪・法令館発行)にもうかがえます。



\*本展開催にあたり、西村聡氏(金沢大学・中世文学会)よりご指導・ご協力をいただきました。

掲載史料と展示史料は一致しないことがあります。